

正論を直言する貴重な人物の旅立ち

(ルポライター) 滝川 康治

「俺は尖っていたからなあ…」が口癖だった。そんな人物だから、北海道の有機農業運動の屋台骨になったのだろう。『勇気農業』の時代がようやく終わった今、瀬川さんの旅立ちは大きな損失であり、残念でならない。最初の出会いは一九九五年、当麻町で開催された「食糧問題フォーラム」の実行委員会。「とっとき米」の実績をもとに、意気軒昂に正論を語っていたことを思い出す。

その後も折にふれて話す機会があり、有機農業の取材では何度も協力していただいた。

「有機農業で一番動かないのは農協で、『道が推進を唱えるからついていく』という捉え方なんだよ。だから道は、有機を北海道農業のフード・コンプレックス(食の複合体)にする気概をもち、知事みずから『推進』を提唱すればいい」(二〇一三年)

「有機認証がJAS法一本になっているのが問題。農水省に『有機農業は日本の根幹をなすものだ』との姿勢がなく、認証登録の単なる取り締まり機関になっている」(十六年)などの指摘には、ずいぶん教えられた。

私のライフワークの一つは「アニマルウェルフェア(家畜福祉)の普及・推進」。有機農業と表裏一体のテーマであり、瀬川さんからは認証事業のあり方などについて意見交換を重ねた。「なぜ、家畜福祉の認証基準に遺伝子組み換え(GM)飼料を認めない項目を入れなかったんだ!」とのお叱りも受けた。

「でんすけすいか」の生みの親でありながら、瀬川さんの存在が抹殺されたかのような町の雰囲気、私はずっと気になっていた。

そこで二〇二〇年、今までの歩みをインタビューし、『北方ジャーナル』に掲載。大型カントリーエレベーター事業をめぐる裏話も聞き、そのまま紹介しようとしたが、本人から待ったが掛かったことも。今となっては、貴重な記録になったように思う。

「北海道たねの会」(現・北海道食といのちの会)の中心メンバーとして奔走。自宅近くの田畑や山林を『有機の里』にする道も模索し、「山羊か羊を飼いたい」と夢を描いた。誘われて一八年秋、一緒に十勝管内の山羊牧場を見学した思いもあるが、その夢を果たすことなく旅立ってしまった。

昨年夏、『有機』の学校給食について、取材のヒントを聞くため自宅を訪れたのが最後になった。「尖ったこと」を言う人物が少なくなり、寂しい限りだが、少しでもその遺志を引き継いでいけたら…と思う。